

国立音楽大学研究紀要第三七集抜刷

二〇〇三年三月二〇日発行

常磐津「堀川の段」研究ノート —— 刊行年を中心に ——

A Study on The "Horikawa-no-Dan" of Tokiwazu-bushi

竹内 有一

TAKEUCHI Yuichi

# 常磐津「堀川の段」研究ノート

## A Study on The "Horikawa-no-Dan" of Tokiwazu-bushi

竹内 有一

TAKFUCHI Yuichi

常磐津節の段物曲の一つに、いわゆるお俊伝兵衛の物語に取材した「堀川の段」がある。その詞章は、おおむね義太夫節「近頃河原達引」に基づいている。常磐津節  
 古本に所載される人名と書誌、周辺史料の調査によると、作曲者は二世佐々木市蔵とみられ、前半部は一八五〇〜六一年の間に、後半部は一八三九（あるいは一八四九）  
 五〇年の間に刊行されたと推定される。付録として、未紹介のお俊伝兵衛ものである常磐津「道行浮名の春雨」を翻刻掲載した。

キーワード：豊後系浄瑠璃、段物、二世佐々木市蔵、義太夫節「近頃河原達引」、常磐津節古本

### 一、はじめに — 常磐津の「段物」 —

常磐津節はその創流期から、既存の義太夫節や宮古路節の浄瑠璃詞章を流用することによっても、数多くの作品を生み出してきた。「仮名手本忠臣蔵」「一谷嫩軍記」「ひらかな盛衰記」「寿門松」など、曲例の枚挙には違がない。この種の義太夫・宮古路の浄瑠璃詞章に基づく作品群は、「段物」と呼ばれている。原作の浄瑠璃全文ではなく、「〳の段」という通称で知られる名場面を抜き出して利用したところに、その名称の由来があると考えられる。

こうした手法は常磐津の前身である宮古路節においてすでに行われているが、常磐津の諸史料において「段物」という呼称の確認できる早い例は、「常磐種」の文政九年刊本<sup>(1)</sup>あたりではないかと思われる。この「常磐種」は、古今の常磐津曲の名題をいろは順に集めた冊子で、文化から嘉永期にかけて、稽古本の出版目録として活用されたと考えられる出版物である。この文政九年本の巻末に「段物之部」が設けられ、約五十種にのぼる段物曲が掲載されているのである。

このように、常磐津の段物曲は、常磐津独自の稽古本として開板される

ことよって、稽古や演奏の便宜がはかられてきた。明治を経て昭和末期まで稽古本の再印が繰り返され、その曲節が今日まで伝承されている作品も少なくない。歌舞伎興行との関わりの中で展開してきた常磐津節の歴史において、段物作品の役割は決して中心的なものではなかったといえようが、常磐津節の曲種や伝承の多様性をもたらした存在価値については、決して無視することができないように思われる。

常磐津の段物曲については、その成立事情が明らかにされた機会のない作品が多い。以下では、そうした段物曲の一つである「堀川の段」について、その稽古本の書誌と刊行年を中心に、簡単な考察を述べてみたい。

### 二、「堀川の段」の概要

常磐津節「堀川の段」は、井筒屋の息子伝兵衛と、彼に深く馴染んだ祇園の遊女お俊が、悪人たちに翻弄された後の、堀川の実家での再開から道行に発つまでの場面を描く浄瑠璃である。

原作の義太夫節は、歌舞伎と人形浄瑠璃での所演で知られる「近頃河

原達引<sup>(2)</sup>の中巻の後段「堀川の段」である。本段は、「近頃河原達引」の中で最もすぐれ、貧しい庶民的雰囲気の中に人間愛を描いて成功を取っているとされる。義太夫正本の初刊は天明五年（一七八五）であるが、天明二年江戸外記座で上演された「猿廻しの段」が初演とも見られ、成立事情にははっきりしない点が多いという<sup>(3)</sup>。

一方、常磐津節「堀川の段」の成立事情については、これまで明確に述べられた機会がないようである。常磐津家元の校訂著作による『定本常磐津全集』（本曲は昭和十七年刊の巻六に所収）の解説においても、各種事典類においても、肝心の成立年代等には触れられていない。

本曲の上演は、素浄瑠璃での所演に限られており、演奏の機会は非常に少ないようである。近年の東京では、平成九年十月紀尾井小ホール主催「日本の伝統音楽シリーズ十二」、平成十二年八月常磐津協会主催「常磐津演奏会」での演奏例がある。しかし、後述する〈前半部〉については、近年上演の機会を知らない。もっぱら、〈後半部〉からの上演に限られているようである。この〈前半部〉は、『定本常磐津全集』にも採用されていないので、全集の編纂された昭和初期当時すでに、〈前半部〉については、その需要が薄れていたのかもしれない。さらにいえば、現在では伝承が途絶えている可能性もあるが、これについては今後さらに常磐津関係者の証言を仰ぎたいと思う。

次に、詞章内容を確認しておく。本曲の詞章内容は、後述するように、義太夫節の原作に比して多少の異同は認められるもの、おおむね原作と同じである。以下、本文詞章に基づいて、あらずじと構成を記す。以下、常磐津の本文については、国立音大附属図書館竹内文庫蔵の稽古本（第三節参照）を使用し、義太夫の本文については、初刊正本を翻刻した岩波文庫本<sup>(4)</sup>を使用した。（一）内に、常磐津稽古本の巻丁、あるいは岩波文庫本の頁数を表示した。

〈前半部〉 伝兵衛の父に助けられたお俊は、貧しい堀川の実家に預けられ、盲目の母と猿廻しの兄与次郎は、悪人を殺めてお尋ね者となった伝兵衛を諦めるよう諭す。一家が寝入って、「まくらにつたふつゆ涙。夢のうきよとあきらめて」（四三頁）のあと、義太夫正本は「ヤクリ」の文字譜を置いて、前半と後半の区切りを示している。本曲の常磐津稽古本は文字譜を記していないが、後述するように、段切の文章を若干追加して、前半と後半との区切れをさらに明確にしている。

〈後半部〉 後半は、「ふけゆくかねもあはれそふ。ころしも師走十五夜」の（四三頁）から。夜更けに伝兵衛が忍んで来るが、母と兄はお俊に逢

わせまいとする。しかしお俊の貞節な誠心が知れたので、猿廻しに装えて二人に祝言の盃をさせ、密かに落ちのびさせる。

続いて、義太夫の本文と比しての異同を列挙しておく。異同の内容は、前半部の段切文の追加、若干の表現の仕方の違い、繰り返しの文章の増減といった程度のものである。接続詞・感嘆詞・接尾語等の細かな異同は省略する。

〈前半部〉 ①義太夫「あのおもしろさを見るときは。イエ／＼しほれがない。あのおもしろさを見るときは」（三七頁）を、常磐津「あのヲ、その引字が悪いわいなア アイヤイ」（上巻二丁裏）に変更。②義太夫「わしやとくしんをさせまして」（四一頁）を、常磐津「わしや得心をしております。ちよと逢て其上でにくしわるしもないよふに得心をさせまして」（中四裏）に変更。③義太夫「思ひきるのがあつちのため」（四二頁）のあと、常磐津「ヲ、あつちの為」（中五表）を追加。④義太夫「夢のうきよとあきらめて」（四三頁）のあと、常磐津「暫うきねのかり住居 替らぬ誓末の世に 浮名を流す堀川に 後の哀を残すらん」を段切として追加。

〈後半部〉 ⑤義太夫「ことばにわつと泣出し」（四六頁）を、常磐津「云にお俊は取すがり」（五裏）に変更。⑥義太夫「ヤコレむこ様。あしで盃をさす（は）あまりつれない」から「エあるかひな。さんな又るかひな」まで（四八・四九頁）を、常磐津（十表）では省略。⑦義太夫「エ、、あるかいな。さんな又あるかいな。くるりとかへつてたつたりな。たつてくれ」（四九頁）を、常磐津（十表）では省略。

### 三、稽古本の書誌

常磐津節の正本・稽古本の出版は、その創流期から万延元年（一八六〇）までは伊賀屋によって、それ以降から昭和五十年代までは坂川屋によってほぼ独占的に行われてきた<sup>(5)</sup>。各所蔵機関における私による稽古本の所蔵調査を踏まえて、書誌事項を整理しておく。

常磐津節「堀川の段」の稽古本は、前述のように、お俊の一家が寝入るところで、〈前半部〉と〈後半部〉に区分することができる。さらに次に述べるように、〈前半部〉〈後半部〉はそれぞれ別個の板木グループで成り立っており、それぞれが別の機会に刊行されたと考えられる。

〈前半部〉は、内題に「堀川の段」（角書「おしゆん・伝兵衛」）とあり、各丁裏のノドに「堀川」という略題を記す。丁裏ノドには、「上」「中」

の巻表記もある。すなわち、「思ひなやみし顔かたち」までを上巻、「マア／＼爰へと小声になり」からを中巻とするが、内容的には上・中に分割する必然性がない箇所であろう。こうした例は常磐津の稽古本ではしばしばみられ、おそらく出版上の便宜のために、細かな巻分けを施したものと考えられる。〈前半部〉の内題下の直伝者名は「常磐津豊後大掾直伝」、奥付の連名は「常磐津豊後大掾・三味線佐々木市蔵」となっている。初刊とみられる稽古本は、上田市立図書館花月文庫に上中下巻を合綴した青表紙一冊本、国立音大附属図書館（竹内道敬文庫）に上巻のみの青表紙本（〇四一〇五五二）が所蔵される。両本とも、奥付の版元住所（江戸人形町通松嶋町）によれば、万延元年（一八六〇）から明治元年頃（一冊本）・安田文吉氏蔵（上巻一冊本）・筆者蔵（上中巻一冊本）の明治期印本などが知られる。

次に〈後半部〉であるが、前半部と同様、初丁に「堀川の段」（角書「おしゆん・伝兵衛」という内題を記す。板心に丁付のみを記すが、再刊本は、第五丁以降の丁裏ノドに「ほりかわ」という略題を記す。〈後半部〉の内題下の直伝者名は「常磐津文字太夫直伝」、奥付の連名は「常磐津文字太夫・三味線佐々木市蔵」となっている。初刊とみられる稽古本は、国立音大附属図書館に、無表紙の下巻一冊本（〇四一〇五五二）が所蔵される。奥付の版元住所（神田鍛冶町式丁目）によれば、嘉永二年（一八四九）から安政三年（一八五六）頃の印行とみられる。そのほか、花月文庫の江戸期印本、安田文吉氏・筆者蔵の明治以降印本などが知られる。

以上の書誌内容で注意すべき点は、丁付表記において、〈前半部〉に「上」「中」の巻記が用いられているのに対して、それに対応する「下」の巻記が〈後半部〉に用いられていないことである。その原因は、〈後半部〉が〈前半部〉よりも一足先に刊行されたためではないかと想像される。〈後半部〉の初丁に、巻表示のない内題があることも、〈後半部〉が先行して刊行された可能性を裏付けるのではないだろうか。この件については、次節に述べる内題下・奥付にみえる人名の検討によって、より確証が得られるだろう。

#### 四、刊行年の推定

前節で整理した稽古本の書誌とその内容、さらに周辺史料によって、

本曲の刊行年代を推定してみたい。

稽古本の内題下・奥付にみえる人名は、多くの場合、作曲開曲や初演に関わった人物であると想定され得る。本曲の〈後半部〉においては、前述のように、常磐津文字太夫・佐々木市蔵の二名がこれに該当する。この連名ですぐ想起されるのは、常磐津創立期における初世文字太夫（二七〇九〜一七八二）と初世市蔵（？〜一七六八）の名コンビである。しかし、本曲の原作である義太夫節「近頃河原遠引」の正本刊行は、天明五年（一七八五）である。初世市蔵はそれより二十年近く前に没しているから、これはまったく当てはまらないことがわかる。

一方、〈前半部〉の直伝者名・奥付太夫名は、豊後大掾である。これは四世文字太夫（一八〇四〜一八六二）の豊後大掾襲名時代（一八五〇〜一八六二）に相当する。江戸三座の芝居番付によれば、嘉永三年（一八五〇）十二月河原崎座興行まで文字太夫名義、翌年正月の中村座・市村座興行から豊後大掾名義である<sup>1)</sup>。この豊後大掾名によれば、〈前半部〉を初世市蔵と結びつけることもまったく不可能である。

したがって、本曲の連名にみえる市蔵というのは、初世市蔵の孫と伝えられる二世佐々木市蔵（一七九八〜一八六一）<sup>2)</sup>を指すと考えられる。江戸三座の芝居番付を調べると、天保九年（一八三八）十一月河原崎座までは前名の岸沢市蔵（市造）を名乗り、翌十年正月同座興行以降は、佐々木姓を名乗り、佐々木市蔵の名を復活させていることがわかる。

以上、稽古本の書誌内容を検討すると、開曲刊行に関わった人物は、〈前半部〉〈後半部〉ともに、四世常磐津文字太夫（豊後大掾）と、二世佐々木市蔵ということになる。そして、〈前半部〉の刊行年は、豊後大掾襲名の嘉永三年（一八五〇）から、二世市蔵の死没した文久元年（一八六一）までの間であったと推定される。一方、〈後半部〉の刊行年は、それよりも早く、佐々木姓を復活した天保十年（一八三九）から、豊後大掾襲名の嘉永三年（一八五〇）末までの間であったと推定される。

ところで、〈後半部〉の刊行年の上限は、第一節で記した名題集「常磐種」によって、もう少し絞り込むことができるかもしれない。その根拠となる事柄は、①「常磐種」の諸本がいずれも「堀川の段」を収録していないこと、②収録曲の下限年が嘉永二年正月となっていることである。この下限年は、嘉永二年修刻本<sup>3)</sup>に収録される劇場初演曲の年代から割り出したものである。尤も、「常磐種」が稽古本の刊行状況をどれだけ忠実に反映しているのか、とくに段物については、刊年に関する裏付けが取りにくいために、その判断が難しいところではある。したがって、現時

点では仮定としておくが、上記の①②にしたがうならば、(後半部)の刊行年は、さらに嘉永二年(一八四九)正月から同三年末の間に絞り込むことができる。

### 五、豊後系浄瑠璃のお俊伝兵衛もの

常磐津「堀川の段」の江戸期の上演記録は見あたらないが、豊後系浄瑠璃(常磐津・富本・清元)のお俊伝兵衛ものは、しばしば江戸三座で上演され、多様な展開を遂げている<sup>9)</sup>。次のような作品がある。

#### (A) 常磐津「近頃恋世語」

天明二年(一七八二)二月市村座上演の常磐津曲。初世常磐津兼太夫、初世岸沢古式部の出演。

稽古本内題の角書に「おしゆん／伝兵衛」とある。作詞者は、稽古本の内題下に「よみ人しらず」とあり、明らかにされていない。上野学園日本音楽資料室に、板面の摩耗した後印の稽古本(刊印年不詳。奥付欠)が所蔵されるほか、文政後期／天保初期頃(大伝馬式目い)がや勘右衛門(の奥付)の印本を安田文吉氏が所蔵される。なお、中川愛水編「聲曲全書 常磐津」(いろは書房、一九一一)に底本未詳の活字翻刻がある。

本作は、天明五年に正本の刊行された義太夫「近頃河原達引」との関係がしばしば指摘されている。しかし、詞章内容を調べてみると、眼目の猿廻しが登場しない点、二人の邂逅先がおしゆんの実家ではなく猿若町の伝兵衛夫婦の家になっている点など、両者の内容はまったく異なっており、作詞の上での直接的な関係は認めがたいのではないかと思われる。本文詞章に基づいて、以下に内容を記しておく。

猿若町のおくげ伝兵衛・おりよの夫婦の住居へ、伝兵衛に馴染んだ八橋屋お俊が押し掛ける。人違いでお俊の父を手にかけて伝兵衛は、お俊に愛想つかしを言って一人で死ぬ気であったが、お俊も伝兵衛の罪を替わりに受け自害する気であった。互いの心底が知れたので、お俊と伝兵衛は覚悟を決めて、浅茅が原へと心中に発つ。後半、二人の道行とともに浅茅近郊の風景をたっぷりと描写しているのが特色といえる。

#### (B) 常磐津(岸沢)「道行浮名の春雨」

劇場上演との関係については未詳であるが、「文久元酉年五月吉日」の

(十六)

刊記のある稽古本が刊行されている。稽古本内題の角書に「おしゆん／伝兵衛」とある。内題下の連名によれば、作詞は桜田治助。初刊本は見であるが、巻末の文久元年(一八六一)の刊記と、内題下人名の修刻跡により、常磐津・岸沢分離期において岸沢派が開板した稽古本であると推定される<sup>10)</sup>。明治十五年頃から明治末期(東京上野広小路元黒門町壱番地さか川平四郎板)の奥付)の印本を筆者所蔵。刊行年の文久元年(一八六一)は、岸沢派分離の翌年にあたり、岸沢派の稽古本出版が集中している年である。既存の台帳や文芸作品など、何らかの素材をもとに、にわか仕立てで岸沢派独自の作品として開板したものかもしれないが、そうした成立事情については今後の調査を俟ちたい。次に、詞章本文によつて内容を記す。稿末に本文の翻刻を掲載したので参照されたい。

お俊と伝兵衛は、心中を決意して隅田川原を歩いている。もと侍の伝兵衛は、悪人とはいえお俊の兄と親を殺めたことへの後悔を、深川遊女のお俊は、伝兵衛への一途な思いを語り合う。互いの命を気遣っているうちに、追手に絡まれる。そこへ伝兵衛の家の白藤が駆けつけて、お家の重宝の無事を知らせ、伝兵衛の帰参が叶うということで大団円となる。冒頭からそのほとんどが二人の道行模様で終始し、最後に重宝が見つかつて大団円になるという類型的な道行曲といえよう。

#### (C) 富本「花川戸身替の段」

「身替りお俊」の通称で知られる。天明三年(一七八三)正月中村座上演。桜田治助作詞。二世富本豊前太夫、名見崎徳治の出演。劇場初演時の正本の写しが東京大学国文学研究室に所蔵され、文化末／天保初期印(小伝馬町三丁目北側)の稽古本が、国立音大附属図書館・無窮会神習文庫に所蔵される。内容は、花川戸の芸者お俊が、故主の園生の前を助けるために、相愛の井筒屋伝兵衛にわざと愛想つかしを言い、美男子の白藤源太に恋慕すると見せかけるまで。

のちに清元節に移され、文政八年(一八二五)三月中村座「其噂桜色時」、天保三年(一八三二)十月河原崎座「其噂楓色時」、弘化元年(一八四四)九月市村座「昔形松白藤」として再演されている。なお、白藤とお俊を中心に扱った作品として、文化元年(一八〇四)正中市村座の富本「妻夫事雨柳」(福森久助作詞)、同七年(一八一〇)三中市村座の富本「風誘鐘四竹」、天保五年(一八三四)五月森田座の富本「二世三世角力盟」、弘化元年(一八四五)正中市村座の常磐津「恋綾瀬流派」がある。

以上のほか、寛政八年（一七九六）正月都座の常磐津「浮借吾妻森」文化九年（一八一二）五月森田座の常磐津「花妻浮名并筒顔」が、お俊伝兵衛ものとして『近世邦楽年表』（六合館、一九二二）にみえるが、正本・稽古本とも残されていないため、くわしい内容は未詳である。

## 六、おわりに

常磐津の段物曲「堀川の段」について、もつとも基礎的な研究として、その刊行年に関する考証を行い、また、本曲の周辺のことについて若干の報告を行った。多くの義太夫作品のなかから「堀川の段」が選ばれて常磐津曲に仕立てられた理由については、今後さらに多くの段物曲について考察した上で、あらためて解答を求めてみたいと思う。二世佐々木市藏の事跡や、常磐津豊後大掾（四世文字太夫）と二世市藏との提携関係についても、今後少しずつ解明していきたい。

一般に劇場音楽として捉えられることの多い常磐津節において、江戸三座の大芝居の喧嘩とは別の次元で成立した長編の段物浄瑠璃が多数育まれた意義については、今後さらにその音楽的・文学的・演劇的魅力を探りながら検討されるべきであろう。義太夫原曲と常磐津段物との音楽的關係といった、音楽学的アプローチも要請されるであろう。

## （付録） 「道行浮名の春雨」 本文翻刻

第五節で記した「道行浮名の春雨」は、これまで活字翻刻された機会がないようである。以下に翻刻紹介することで、今後の調査研究の便宜をはかりたい。底本は、文久元年刊の板木の内題下を埋木した修刻本で、明治十五年頃から明治末期までの間の印本とみられる。所蔵は筆者。

体裁は、題簽中央貼の青表紙。半紙大。六行六丁。丁裏ノドの匡郭内に、略題と丁付「おしゆん志」「おしゆんカスレ」「おしゆん三」「おしゆん四」「おしゆん五」「おしゆん六了」を記す。刊記「文久元酉年五月吉日」。

内題は「おしゆん／伝兵へ」道行浮名の春雨。内題の下に、「常磐津小文字太夫直伝／岸沢式佐節付／作者桜田治助述」の割書。この割書部

分は明らかな埋木修刻。修刻部分は板木の摩滅がほとんどない。

題簽題は「おしゆん／伝兵衛」道行浮名春雨。題簽題の下に、「常磐津小文字太夫直伝／正本所坂川平四郎」の割書。この割書は、初刊時の内容とは異なるだろう。

奥付連名は「常磐津豊後大掾・三味線岸沢古式部、奥付版元名は「上野広小路元黒門町志番地／正本版元東京へ地本／問屋」さか川平四郎板」。この奥付は修刊時に差し替えたものである。

底本の摺りの斑や板面の荒れにより判読不能の部分は「」で示し、「」内に推定される文字を補った。改行は適宜筆者が施した。

「行も帰るも世の中の 義理となさげはひと筋に「くちかはか」らぬ隅田なはて「しほる、はなのし」た露は「己がなみだか春の夜の あめの晴間をみやとがは 今宵かざりと手を引ぬに（一オ） たのみすくなき白魚火は みらいのやみをてらすかと 心ほそくも三めぐりの 森のこかげへ立よりて

男「おもひまはせば は、うへ、いわふよふなき此身の不孝「女」「死なでかなはぬみとなりしも みんな私からおこつた事 モシかんにんし「てく」だ（一ウ）さんせ 男「イヤ／＼どふ思ひなをしても悪人とは云ながら げんざいそなたの兄親を手にかけた伝兵衛と心中したといはれては 女「なんのママ 人のそしりも世に有時 たとへ親でも兄弟でも 男「サアそのころざしはうれしなれど（二オ） どふぞそなたかながらゑて 女「エアノしんじつおまへは そうした心でござんすか ソリヤきこへませぬ伝兵衛さん

「お詞無理とおもはねども そもあいそめし そのころは また黄ひやうしの折手本 寺屋もどりに取かはす ふみに思ひをかきつば（三ウ）た 家橋よりの隠名に忍びおふせた甲斐もなふ 国をへたて、深川に今は流れのうきつとめ たがひにたづねこがれたる念がとゞひてめぐりあひ 斯うした訳に情ない ひとり残れとどふよくな むごひわひのと取すがり はけも涙の（三オ）しのびなき 「かくては はてじと伝兵衛は かなたの芝に座をしむれは 「おしゆんもともに手をあわせ らいせをねがう妙法の功力唱るそのひまに すでにこふよと みへけるを女「ヲ、これ またしやんせ わたしをだまして ひとり死ぬので（三ウ）ござんすか 男「イ、ヤそうでは 「女」女子は心おろかにて「かくこしてさゑ うろたゑるもの 私をさきへ殺さいで そりやどふよくで ござんすわいなア 男「サ、是ほど迄にかくこした そなたをのこ

し なんのひとりで死なふぞいのう(4オ) さりながら せめて最後  
はさむらいらしう はらかき切て そなたにもみれんに跡へのこらぬせ  
うこ うたがいほらせそのうへにて 女「今はのきはになんのマア  
おまへをうたごふことかいなア サアどふぞわたしを(4ウ) 男「イ  
ヤわしから  
あらそふそのまに木かげより

「人ころしの伝兵衛とつた

「よふすはなにか しらさぎの やみにたゞよふ さよあらし「あ」やも  
するどき やいばのひかり あしらひかねてちり／＼に かしこ(5オ)  
をさしてにげてゆく 見おくる向ふへ しらふじが いきをきつてぞ  
はしり来る

白藤「これ若旦那 はやまつてくださるナ」「ヤ、しらふじか めんぼ  
くない コレそなたからうけとつた二品を権兵衛(5ウ) めに うちわ  
られ それぢやによつて 「これはしたり またつしやり その二品は  
にせものにて まことのたからは これ爰に 男「ヲ、これこそまこと  
の花婿 女「エ、スリヤさいせんの 白「ふたしなそろふ うへからは  
す(6オ) くさまこれより本地へ御帰参「男「エ、かたじけない  
「これ逆夢のみなめざめ 目出度ことをや かさぬらん  
文久元酉年五月吉日(6ウ)

(1) 註

(1) 東北大学附属図書館狩野文庫本(天保三年以降の後印本)を参照した。「常  
磐種」の書誌は、安田文吉「常磐津節の基礎的研究」(和泉書院、一九九二)  
に詳しい。新曲の名題追加に伴って、板本の修刻も行われている。なお、文  
化八年刊本(九州大学図書館蔵)は三十三曲の段物曲を収録するが、段物曲  
を抽出しての分類と段物の呼称はみられない。

原作の本名題は、常磐津稽古本には記されていない。

『演劇百科大事典』(平凡社、一九六〇)、横山正執筆項による。

(4)(3)(2) 『日本古典文学百科大事典』(岩波書店、一九八四)、内山美樹子執筆項によ  
る。

(6)(5) 頼桃三郎校訂『近頃河原達引・桂川連理橋』岩波書店、一九三九。

拙稿「分離期岸沢派の語りもの」(国立音楽大学音楽研究所年報) 第十一集  
一九九五、拙稿「老の戲言」の所収曲をめぐって」(『楽劇学』第七号、二  
〇〇〇)を参照。

(十八)

(7) 東京音楽学校邦楽調査掛編『近世邦楽年表』(六台館、一九二二、二二五頁)  
は、十二月十八日付、嵯峨御所よりの受領書を典拠とする。この受領書は、  
編纂に助力した常磐津家元(当時六世文字太夫)の所蔵と推察されるが、そ  
の現存については未確認。

(8) 生没年は、『日本人名大事典』(平凡社、一九三七)の秋葉芳美執筆項、『日  
本音楽大事典』(平凡社、一九八九)の竹内道敬執筆項に従う。「孫」伝説の  
確証は得られていない。後述するように、佐々木姓復活年を天保十一年とす  
るのは誤り。

(9) 天保十二刊本の板木に全面的に修刻を施して名題を増補したもの。刊記の一  
部が「嘉永二酉歳初冬」(一八四九年十月)に修刻されている。上野学園日  
本音楽資料室本を参照した。

(10) 本節では、後述する資料のほか、飯塚友一郎「歌舞伎細見」(第一書房、一  
九二六)、伊原敏郎「歌舞伎年表」(岩波書店、一九五九)、『演劇百科大事典』  
(平凡社、一九六〇)、前掲『近世邦楽年表』などを適宜参照した。

(11) 分離期岸沢派の正本出版、および内題下の修刻とその現存する板木に関して  
は、前掲「分離期岸沢派の語りもの」を参照されたい。なお、本稽古本の存  
在は、同稿脱稿後に確認されたもの。